

大 阪 ■ ■

No.25 2003. 7. 26.

大阪哲学学校運営委員会 Copyright©, 2003

哲 学 学 校
■ ■ 通 信

【郵便振替】 01170-1-81313
【E-mail】 byodo@portnet.ne.jp (臨時)
【Home Page】 <http://www.venus.dti.ne.jp/~imoto/> (臨時)
【Net Forum】 休止中
【代表者】 山本 晴義 (校長)
【発行者】 平等 文博 (運営委員長)
【編集者】 平等 文博

「無知の知」と『十七条憲法』に戻ろう

やすい ゆたか (会員)

日本では年間不況が原因で自殺している人が三万人にのぼるのではないかとされています。イラク侵攻の時の死者よりも多いのです。もちろん戦争で死者の数を減らしたのは、兵器のハイテク化によるわけで、死者の数が軽減したことで戦争への批難をかわしているわけです。イラクがバクダッド決戦に固執して執拗に抵抗を続けていけば、死者数はいくらかでも増えていたでしょう。戦争が大量虐殺で、人類の破滅に道を拓くものであるという戦争の本質は変わっていません。そのことはさておき、今や不況対策は戦争に立ち向かうぐらいの真剣さで取り組まないと、日本経済が深刻な衰退化の道をたどる危険があるわけです。

ところで小泉首相は「構造改革なくしては景気回復なし」と宣言して構造改革の旗をふっていますが、その成果は一向に話題にのぼりません。景気対策でも構造改革でもそのやり方について元々無知なのではないのでしょうか。もちろん閣僚に経済学者を登用するなど無知である筈のない人が担当していますが、妙案は浮んでこないようです。

りそな銀行に対する公的資金投入が必要になり、銀行国有化が現実化しつつありますが、不良債権を抱えて詰まってしまった金融のパイプを通すためにはやむを得ない措置でしょう。不良債権問題を処理してしまうために、主要銀行を国有化し、しっかりした企業の再建の見通しをつけたう

えで積極的に融資を進める必要があります。そのことで通貨量が増大してインフレーションが起きたにしても、デフレーションを押さえる効果が期待できるわけです。そのことによる円安の進行で輸出拡大・輸入減少になれば、国内生産の拡大、景気回復にもつながります。

問題は、ハイパーインフレーションを招くことにならないか、物価が上がれば、購買力が低下して余計に不況が深刻にならないかということです。円高が不当な水準の場合、これを切り下げていけない限り、正当な国際競争になりませんから、国内企業の衰退は避けられません。ですから思い切った公的資金を使った不良債権処理は、円高を是正する格好のチャンスなのです。

しかし調子によって金融政策に頼りすぎますと、構造改革や技術革新や労働力の質的向上という本来やるべきことを怠けてしまい、日本経済の地盤沈下・衰退は避けられません。やはり根本的な不況の原因は日本の技術水準の相対的低下にあるのです。この問題に総力を挙げて取り組まない限り、日本経済は衰退します。

ところでどうすれば生産性を高めることができるかは、はっきりいってだれにもわかっていません。「無知の知」に戻れというのは、その意味なのです。もし知っている人がいるのならその人に教えてもらえばいいわけですが、グローバル化の

時代を迎えて、これまでの常識では通用しません。人口の高齢化が進み新しい技術の吸収がむつかしくなったことも、日本の立ち遅れの原因になっています。大胆に若年労働力の流入を図るのも一つの方策ですが、受け入れ体制しっかりしていないと、社会混乱の原因にもなりかねません。

「無知の知」を自覚すれば、対話によって衆知を集め、試行錯誤しながら、経験を交流し合って成果を積み上げていくしかありません。ソクラテスの発想は元来そういうものであったのではないのでしょうか。1970年代にQCサークル運動が各職場で起り、品質管理・改善が随分進み、日本の技術が高く評価されるようになりました。そうした経験も参考にすべきでしょう。とにかく各企業・各自治体・各学園でどうすれば技術や生産性が改善できるのか、一緒に現場から全員が取り組む体制を作り上げる必要があるわけです。

学園というのも取り上げましたが、日本の学力低下というのが本当に進んでいるのなら、これはゆゆしき事態です。日本の生産性の高さは労働力の質の高さにあり、それは学力がダントツで世界の最高水準であったからと言われていたのですから。もちろん学生も含めてどうすれば真の学力向上ができるのかを話し合い、全体の学力向上のために助け合う体制を作り上げる必要があります。こういう議論の建て方をしますと、生産力主義だという批判が返って来ます。別に日本が競争に勝つ必要はないではないか。これ以上生産性を上げ、環境を破壊してどうするんだ。経済成長などゼロでいいというわけです。もちろん環境を破壊する形での開発や、環境破壊を進行させる技術革新というものには強い規制で臨むべきです。しかし環境問題の解決もハイテク・バイオ技術の進歩によって実現するしかないのです。その意味では環境技術の開発によって、日本の自然環境と調和する技術革新のプランを立てて誘導を図ることも大切です。

生産力主義に反対する人も、自分が不安定な職場にいて何時路頭に迷うかもしれない境遇に陥れば、政府の景気対策に不満を洩らすでしょう。経済のグローバル化は同時にグローバルな規模での大競争時代を現出せざるを得ませんから、この競争から抜けることはできません。実際自分の企業が倒産しかかり、保険や年金もあてにならないという事態に陥ろうとしているときに、日本経済の衰退をむしろ歓迎するかのよう論調はあまりに

無責任です。

また国家総動員的に生産性向上のための体制づくりをして、衆知を集めて技術革新や労働力の質的向上を図るべきだという発想は、日本の集団主義そのものだし、戦時体制で全体主義だという批判もあるでしょう。たしかに強引に国民的議論もなされずに強制するとすれば、労働強化や賃金引下げの口実にされたり、犠牲やしわ寄せが底辺労働者や中小企業に回されたりします。

それに今日の日本の企業の実態、労働者の実態からみて、現在の日本人には、とてもそうした国民的運動に参画しようとするメンタリティに乏しいかもしれません。実際これを実現するには相当のエネルギーと覚悟が必要で、しかも国民全体が厳しい自己変革や相互批判の中で鍛えられることになります。そんなことは真っ平だということになり、笛吹けど踊らずに終わる可能性もおおきいでしょうね。しかし私が敢えて『憲法十七条』まで持ち出し、衆知を寄せ合い、知恵を絞ってみんなで日本経済再生に取り組む体制をつくれば、日本経済は立ち直ると言うのは、たとえ無駄であっても、一度はその方向でやることを真剣に討議して欲しいからです。私も民主主義者で人権派のつもりですから、そんな集団主義的な方向は嫌だということで拒否されれば仕方ないと思います。クーデターでも起こしてファッショ的にそういう体制を押し付けようとはさらさら思いません。衰退の道を選ぶのも自由ですから。

哲学というのは観念的に認識の仕組みや論理の法則みたいなものを論じたり、存在の意味を形而上学として探求するだけではないと思います。現に不況で苦しんでたくさんの人々が追い詰められ自殺しているという苦悩から出発して、根源的にこの危機に立ち向かう知を生み出し、提案する義務もあるわけです。そして国民も哲学からの提案に真剣に耳を傾けることが必要です。日本が衰退するなら、主体的に衰退すべきです。やすいゆたかという自称哲学者から集団主義的な再建築もあつたが、それは自由主義的個人主義には合わないから、斥けたということで、主体的に衰退の道を歩むべきなのです。

この議論は哲学ではなく、経済学だという受け止め方をされる方は、哲学は、ひまつぶしと考えておられるのでしょうか。(2003.06.01)

大阪哲学学校会員の皆様、はじめまして

川口 敦子（会員）

私は現在、日本大学通信教育部の学生です。と、言いましても7年目にしようやく卒業のめどがつき、卒業論文に取りかかったところです。

私と哲学の出会いは、看護系専門学校で教員養成所である、某センターでということになります。入学式の日、センター長は開口一番、「答えは差し上げません」と、「??？」看護なり教育なりについて、「全ては自分で考えなさい」ということでした。なんとも不安なスタートではありましたが、センターのカリキュラムは大変充実したもので、知らないままに何やってきたんだ？という目からウロコの日々。考える材料だけはたくさん与えられ、あっという間の一年を過ごし放りだされました。

今思えば、それはソクラテスのように「愛知者」であれというのが、センターの教育理念だったのです。一年の間に、私は私の無知を知り、好奇心の向かうままに、哲学を専攻して来た訳ですが、さらに無知を認識し続けたに過ぎません。卒業を目前にし、そのあとのことを考えると、なんとも落ち着かない今日この頃でした。

哲学との出会い

初めて入会した者です。自己紹介文を提出するという事で、哲学に関心を持つようになった経緯について書こうと思います。

10年前になりますが、当時兄が精神的に荒れてきて、私も辛い日々でした。兄はマスコミの言う事や流行の常識、現代美術の考え方等にすっかりのせられていたのですが、兄の言葉を聞き、そういう考え方に縛られている事が根本的に兄の不幸を招いている様に思ったのでした。

元々コンプレックスが強く傷つき易い人だったので、その考え方ではもう助からないと思えました。当時私にもっと広い知識があれば、色々な方法を思いついたのに残念ですが、その頃は森田療法等で好感を持っていた仏教の考え方の良い所を取り入れれば兄も楽になるのではと思ったので

しかしながら、この大阪哲学学校の存在を知った今、大変安心いたしました。次に私の知的好奇心に答えてくれる頼もしい存在です。講師の先生方や会員の皆様方より、多くのことを知らない分だけ、得るものが多いのですから。

仕事柄、人の生と死のそばにいる者にとって、本来非日常の世界が日常になっています。いろいろなことを考えずにおられる方が、どうかしてしまっているのですが、人間あまりにも過酷な状況に直面すると、シャッターをおろしてしまわなければ、やって行けないというのも事実です。それも仕方ないことだと思いますが、「愛知者」として目をそらさず、耳を塞がず、考えることをやめずにあり続けたいと思います。

とは言うものの、現実の私は、ソクラテスに関するレポートがまだ合格にならず、苦勞しているという状況です。こういうレベルの人間も、快く仲間に加えてくださることに感謝します。どうぞ宜しくお願い致します。(2003.07.13)

小野 佐知子（会員）

結局この作戦はコケて、その後兄は心不全で亡くなり、母もめっきり弱り、父が(父は人非人なのですが)ムチャクチャなのを押さえるのに、これまたすごいストレスでした。

その時随分助けられたのが「老子」でした。世間の表と裏、生きのび方、負けてる様にみえても勝っていると色々教えて貰いました。哲学を学び始めたのもその頃です。どこかしっくりこなかった西洋哲学ですが、最近、キリスト教以後は理性を重んじ感性を軽んじてきたが、それ以前のギリシャ哲学では感性は重んじられていた事、また歴史哲学はかつて一度も美という観点を導入したことはないが、プラトンは時間の世界と永遠の世界の通路は思考ではなく美によるとした事から、美の観点を持つ歴史哲学があっても良いの

ではないか、またプラトンは天上の美を想う傾向が強く、近年までその傾向をずうっと引きずってきってしまったが、美といっても日本の伝統芸能や宗教にみられるように、醜をくぐった美(老骨に咲く花とか)や美・醜が一体となったような美もあるのではないかという事で、美も今までにない新しい現われ方というものがあるのではというお話を聞き、今まで歴史といえ私の頭の中でドヨヨンとしていたのが、新しい視点で心わくわくするように開けてくる感じがします。

意味、目的を感じとる時、感性が最も研ぎ澄ま

された所、という事で、これは人生についても同様で、美を感じる所に存在意義があるような感じがします。今の時代、どうも左脳ばかり使って右脳が使われていないそうです。哲学でも思考に先立つ感性の重要性が見直され、感性が最も強くひかれる美というものの意義深さが見直されているようです。私もこれから美的感性を使って生きにやならんと心新たにしています。

まだ勉強を始めただばかりで何も知りませんが、哲学のおかげで随分助けられているように思います。どうぞよろしくお願いします。(2003.07.19)

小澤征爾・その後

義積 弘幸 (会員)

私は「大阪哲学学校通信」第23号(2003年)で、「今年最も注目する人」として、小沢征爾を取り上げた。それと呼応するようにNHKテレビが、三度、小沢征爾を取り上げた。

まず、あれほど忙しい人なのに、彼は、日本の若手音楽家を育てる活動もしている。その時は、モーツァルトの歌劇「ドン・ジョバンニ」の演奏をやっていた。先に、若手音楽家の感想を言えば、「こんな貴重な体験ができてよかった」というものだった。そして、若手に対してといえども決して妥協というものがなかったのは、見るべきところだと思った。私はそれを見ていて大変感動した。主に練習風景がほとんどだったが、彼が、よく言っていたのは「他の楽器の音、演奏者の声をよく聴いてほしい」ということだった。

次は、ロストロポーヴィッチと一緒にやっている活動なのだが、過疎地へ行ってのコンサートだった。これは、有名なチェリストであるロストロポーヴィッチの発案なのだが、ほとんど何の宣伝もなく(ポスターもなし、チラシもなし、チケットもなし)当地に行って演奏会をするのだ。その時は、ある所のお寺の本堂だったが、そこで、さほど有名ではないハイドンのチェロ協奏曲と、これはよく知られているモーツァルトのディベルトメント(喜遊曲)K・一三六を演奏していた。過疎地だったから、年輩の人が多く、オーケストラの演奏を初めて聴く人も多かったようだ。しかし、その人たちが「感動した」と言うのだ。

先に述べたように、このアドバイスはロストロポーヴィッチのものなのだが、彼は「見てみる。これぞクラシック音楽の楽しみだ」と言いたげであった。

最後は、NHKのテレビ放送五十周年記念における「有名人のこの一言」というもので、過去の番組の再放送だった。その時、彼は言っていた。

《我々のやる曲は大体決まっている。だから、それに習熟すれば、西洋人であろうが、どこの国の人であろうが、きつとうまくなる。一生懸命練習すれば、音楽家になれる。私は、それを信じている》と。

それを聴いて、私は大変感動した。私が、田舎という学問をするには恵まれていない場所に住んでいるからだろうか。

哲学だって、大体、必読の書は決まっている。一生懸命やれば、きつと芽が出るのではないか。その意味で、小沢の言葉は私たちにも通じるものだと感じた。決して不可能ではないのだ。大切なことは「年月永く^{なが}励み務むるぞ肝要」(本居宣長『うみやまぶみ』)なのだ。やはり、小沢征爾^{かん}が今年(今後もだ)注目すべきだという私の勘は間違っ^{かん}てはいなかった。私は、それがうれしかった。(2003.02.09)



ある勝負師との邂逅

松尾 猛省 (会員)

80年代の後半であった。モンマルトルの安ホテルに滞在して絵を描いていた。ホテルの名はHotel des arte フランス式ではオテルデザールつまり芸術ホテルとあって様々な芸術家たちが長期に滞在していた。特に多いのは日本の絵描きたちで自炊設備のついた部屋が費用も安く借りられたせいもあった。

当時のパトロンは腹の突き出たムッシュで他界の後、息子の代になると星なしから三ツ星に改造、ホテル代も高騰のため長期滞在者は皆無となったのがなんとも寂しい思いがする。今のデザールは、名前はいっしょでも芸術ホテルの面影はない。

わたしがはじめてこのホテルに泊まったのは74年の夏であるからかれこれ30年が経つ。

S氏もこのホテルで知り合った絵描き仲間では中学の美術教師を定年前に辞めてこのホテルに滞在していた。教師時代は夏休みを利用して滞在していたが、帰る頃になると後ろ髪を惹かれる思いで泣きたくなるとよくこぼしていた。今ではパリで絵を描く長年の夢を実現しあこがれのパリで絵三昧に過ごしている男である。

その日、ルクサンブルグ公園に行くとき彼も来て描いていた。アンリ四世の妃マリ・ド・ティスがルーブル宮を嫌って造営させたといわれるルクサンブルグ宮は広さ23ヘクタール、マロニエ並木のあいだをぬって女王やその他の彫像が百体、様々なポーズで世のうつせみをみおろす。クリの葉をしたマロニエはやはり栗科なのか、秋には栗と見まがうほどの実を落とす。紅葉ははやい。その黄金色に映えるマロニエの葉群は眼に染み入る鮮黄を放っていたが近年は地球の温暖化のせいであろう、往時の面影が薄れつつある。

午後から空模様が変わり、急転直下のわか雨に不意打ちを食い、慌てて道具をかたづけ、軒先に雨宿り、そこへS氏も転がり込む。暫らく佇むうちに雨もあがる頃だった。

背後に人の気配がして、「あのう、日本の方ですか」との声、地図を片手にねずみ色のジャンパーを着た男がパンテオンへ行く道を尋ねる。観光できて四、五日目とか言い、ホテルは四つ星の二万円クラス、イタリアにも回る予定で旅行費用は

200万という。それを聞いたS氏仰天し、200万もですか。それだけあればパリで僕ら一年過ごせますよという、そんな安いところあるんですか。私は何にも分からなくて、一切を交通公社にまかせきりなもので…と。

まあ、お金のある人だから構わんでしょうけど。S氏が放言すると男はそうでもないんですが、漸く本音らしきものを打ち明け始めた。

軽いキルティングの風体から、歳は40前後に見え、何かの商人かに見えたが、男は証券会社に勤めているといった後、今回一ヶ月の休暇をとりこちらにやってきたと洩らす。

よくまあ、サラリーマンが一ヶ月も休暇で大変でしょうということ、はあ、まあそれはそうなんですけど、ちょっと事情もありましてねえ…男は重く塞いだ胸のうちを語り始めた。

「私のほうの会社は債権を取り扱ってましてねえ、まあ今までは問題もなく順調にきていたんですが、この秋に国債がひどく暴落しましてねえ、ブラックマンディという奴です」といわれてもこちらは新聞も皆目眼を通してないから、その辺の事情はわからなかった。

「その暴落で会社が膨大な被害がというわけですか?」「会社も相当の被害が出た事は事実ですが、実は私の個人的な投資上の問題がありまして」「その暴落で大穴があいたということですか?」「ええ…」「どのくらいの金額ですか、例えば何百万とか、何千万とか?」「いやいや、そのくらいの金額なら別段それほどのこともないんですが…」淡々と驚きもなく言葉の継穂をかさねる男の口から「80億になるんです」とポツリと洩らした金額に、S氏もわたしも顔を見合わせ喉元が詰った。

「80億、なんと桁が違いますなあ、そんな数字言われてもとてもびんと来ません」「まあ、素人さんはそうですけど、私共の間では数をまとめますので、何十億、何百億とかに」

数字遊びではない。債権の売買のたびにそれだけの現ナマが動くという。80億の損害なにか、身震いしそうな金額であったが、もしそれが暴落でなく、順調にいられたらと訊ねる先に、240

億私の手元に転がり込むはずであったと。男はやつれた頬骨を微かにくぼませ、ほくそえんだ。

「それでこちらのほうに」「会社に行っても仕事も手につかんし、家に帰っても落ち着かんのです。寄る辺のない身になりましてねえ。ヨーロッパにでもゆっくり散策して、気をとりなおすつもりです」

陰っていた雲もすっかり取り払われ、陽がでて嘘のように燦燦と照りはじめた。わたし達は日当りのいい花壇の椅子にもたれ、再び男の繰り広げる未知の世界の話に聞き入った。

男は勝負師に生きる男の気構えと魂胆を語った。

四六時中、情報収集から離れられず、男にとり自由の寛ぎのひと時すらない日常であった。一日にタバコを五箱も十箱も買う羽目になるのは、いった先で情報の事が頭にあって神経が休まらず、それに捉われの果報であるといった。喫茶店でゆっくり寛ぐまもなく、犬を連れての散歩も気づくと犬だけが先に帰っている始末だと語る傍で、「それは人間疎外だ」とS氏がたてつく場もあった。

ひとつだけ聞きたいんだけど、億万の金が手に

入ると、一生ラクに過ごせるし、もうその辺で勝負師から手をひく気はないのですかのふたりの問いかけにも、それはないですときっぱりと拒否。男の生甲斐はあくまでも一獲千金の夢、一生安楽にとかは第二、第三の問題、勝負師の生甲斐はあくまでも一獲千金と譲らなかつた。たとえその影に自死に追い込まれても、それが男としての口マンだと語った。

わたしたちは潮時を見て立ち上がった。男も立ち上がり、それではパンテオンの方へといつて、軽く頭をさげ去っていった。肩を幾分窪みがちに歩いていく男の後姿にわたしたちは、メルヘンの世界にでも遭遇の錯覚じみたもので見送っていた。

噴水のほとりに向かうS氏が「あんな大きな話を聞かされて、絵筆がてにつくかな…」声もうはずっていたが、わたしもまた、妙な心のうずきを覚え、なにかを押し殺しながら元の位置に戻ると、軽く息をととのえ、気分をとり直すや、再びイーゼルに立ち向かっていた。

人生について考える (3)

西山 覚 (会員)

私は所謂「いい子」で育ってきたため現実の世界に対する適応力が乏しく、神経質な性格になってしまいました。私は鬱の病気を持っているので症状としては対人恐怖症や強迫観念や特定の人に対する甘えなどがあります。「かくあるべき」という観念が強く、其の観念によって自縄自縛の状態になってしまうのです。

これは私の心のなかにある権威主義と関係があるのではないかと思います。

権威主義というのは心の奥深くにある場合にはいろいろな形態で心の葛藤の原因になります。私が自分の感情のコントロールに過度にこだわりすぎているのも一つの理想像を設定しているからだと思います。

「かくあるべし」というのは一つの権威主義だといわざるをえません。ある理想を設定しても決して到達できず、そのためにストレスがたかさん溜まって非常に疲れるのです。

そしてその反動として喪失感を抱いて虚しく感じたり、全面否定のニヒリズムに陥ったりして人間不信となり対人恐怖症になるのだと思います。全面的否定の反動の結果なにか絶対的なものに救いを求めたり、「甘えすぎ」ではないですが特定の誰かに全面的に甘える傾向があるように思います。

完璧なものの完全な理想など存在しないのですから、それを固定的な目的にするのは基本的に間違っています。私の心のなかにも権威主義が根深く存在しているようです。

権威主義は精神衛生上も非常に悪影響をおよぼしています。不完全なものの未成熟なものを受け入れていく姿勢が大切だと思います。また非合理的なものを受け入れることも必要でしょう。

現代は理性主義の時代ではなくアソシエーションの時代だということを深く自覚しておくべきだと思います。権威主義が克服できたら生きていく

のがもっと楽になるでしょう。

プライドも必要ですがプライドと権威主義とは違うものだと思います。

権威主義は法律上はいちおう自由、平等、ということが抽象的に保証され家柄や門地によって差別されないことになってはいますが日常生活世界においてはいろんな形態で存在しているし多くの人達にも無意識的にも意識的にも存在しているのです。

例えば学歴や勤務先や出世の度合いや家柄やその他にもいろんな形態で日常生活を営む上で存在しているのです。これで様々な人をランク付けされるのですからストレスが溜まり精神的疾患を患う人達が増加していくのも理解できるというものです。

社会的、国家的レベルでは崩壊したソ連や北朝鮮をみれば権威主義というものがいかに内実のない人間性を歪めてしまうものであるかは歴然としています。

私も権威主義と闘っていますし、私自身の中にある権威主義とも闘っていますが道は陰しく反省することの多い日々を送っています。

生老病死という人間にとって避けて通れない苦しみ、近代世界システムに振り回されて物件化されて苦しんでいる人達が、何か絶対的なものに救いを求めるという感情はおなじ空間を生きているわたしにも良く理解できます。

神なき時代の宗教におおくの真面目な人達が入信するのもその人達を制約、条件付けているものとの関係を観ておく必要があります。そうでないと単なる理論的批判だけで現実はずらわらずに残ることになるからです。

貧しい人間関係、貧しい生活、強烈な権威主義が背景として存在しています。私自身もそのような世界から自由ではありません。

アソシエーションの原理は権威主義とは無関係ですが、脱アソシエーションの過程で権威主義的な要素が出てくる可能性はあります。

反権威主義の旗をかかげた自立した諸個人が自覚的にアソシエーションを実践していかなくてはなりません。

私もしばしばニヒリズムに陥ることがありますがニヒリズムにただ陥ってばかりいないで(ニヒリズムに陥るとするのは苦しいことです)反ニヒリズム、反権威主義の活動に積極的に参加したいと思っています。

反権威主義的实践をするためにはその実践をする諸個人の自立の度合いや一定の水準の能力とモラルが要請されることになるでしょう。

そのためには何が問題になっているかという自覚が、主体性の自覚が必要になってくると思います。利害関係の問題をどのように調整するのかという問題も出てきます。

現在は新しい普遍的原理と価値観への移行期、過渡期の時代だと思います。ところで権威主義についていろいろ考察してきましたが、二十世紀の様々な権威主義については全般的に見た場合その威力を徐々になくしていきつつあるように思われます。

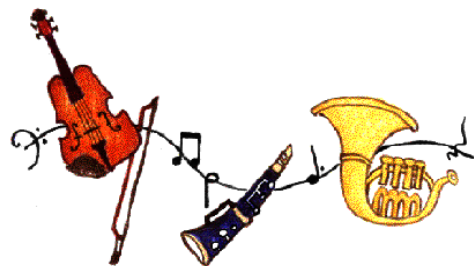
それは拡大の論理である資本主義制度が世界的環境問題などのような地球の有限性によって限界が明らかになりつつあるからです。

「今までどうりのやり方ではやっていけない」という意識が世界的に広がっています。

生産諸関係が大きく変化していき、労働の形態の激変などにより価値観の多様化や家族形態の変化やモラルの変化が生じています。

このような近代世界システムの有限性の自覚により今までの古い権威主義の威力は相対的に低下しつつあります。IT革命によるグローバルな支配形態の進展はグローバルな形態の対抗運動を形成しつつあります。近代世界システムの時間と日常生活世界の時間との間のずれはありつつもその支配にたいする対抗運動は「陣地戦」という形態で展開していくように思われます。人間の本質が「社会的諸関係の総体」である以上、社会的な変動や調整は諸個人の意識や無意識の領域にも変化をもたらすモメントになるでしょう。

ニヒリズムというものも時代の産物だということをおぼえてはなりません。過渡期におけるニヒリズムも「現実を止揚する運動」過程において克服されていくものであることを見落としてはならないでしょう。



お世話様です。

この度は平等さんの「日常生活世界と死」の講義を大変興味深く拝聴いたしました。その中でひとつ、ふと気づいた事がありましたので報告します。

レジュメの6)「死の受容-課題としての死の受容」のなかの“死を恐れる事”と“只恐れる事”の区別の所で、〈ただ 死を恐れる〉とはどういうことかと考えていました時に、配布されました参考資料のなかの三田誠広氏の「動物は……本能的に恐れるだけ」、の一文から、本能的に死を恐れる事が只死を恐れる事なのかと考えました。そして彼によれば「認識する主体が無くなれば、苦しみも快樂もない。それは悲しむ事ではないし、恐れる事でもない」としています。快樂を恐れる事はないでしょうから、恐れる事は苦しみと言う事になります。動物に実存的な恐れがあるとは想像しがたいので、動物が本能的に恐れるのは死そのものではなくて、死に至るプロセスにある苦しみではないでしょうか。

死んだ方がましというようなことをよく耳にします。私の叔母は肺炎で死にましたが最後に「こんなしんどいんやったらもう死んでもええわ」と言い残しました。それらは苦痛からの回避を死に求めていることを意味しています。死は逃れようとするだけではなく、望まれるものでもある。そしてそのキーワードが苦痛であるとすれば、あくまで思いつきに過ぎないのですが、それは出産の苦痛との相関図で何か描けるのではないかと思いました。(2003.06.24)

【往復メール】



「日常生活世界と死」を拝聴して

五福 久雄 (会員)

.....

死を怖れること vs. ただ怖れること

平等 文博 (会員)



五福さま

お忙しいなかを私の拙い話にコメントをいただき、本当に有り難うございます。

「死を怖れること」と「ただ死を怖れること」の区別、最近の死の受容の論調を見ていると「怖れるな」「受容せよ」という流れが非常に強く、そのなかには「楽しいあの世が待っているのだから笑って死のう」というようなものもあり、私など「ちょっと待てよ」と思ってしまう。「死を怖れる」のは当たり前、私はそう思います。

死への怖れの中で大きいのは、おっしゃるように死に至る過程での苦痛だと私も思います。苦しむことなく死にたいというのは私も含めて多くの人が願うことでしょう。あまりにもひどい苦痛の場合、これをご指摘のように死が解放的な意味をもつ場合も(望むべきことではないですが)出てくると思います。積極的安楽死や自死もそうした場面で問題になってくるでしょう。ですから、延命よりむしろ苦痛の除去にもっと力をそそぐ必要があると私は思います(苦痛の除去が結果として延命につながるケースも多いと思います)。叔母さまのようなお気の毒なケースを無くす努力が医療従事者には求められています。また人間にとっての苦痛は身体的なものだけに限りませんので(まず取り組むべきは身体的苦痛の除去だと私は思いますが)、その面ももっとよく考える必要があります。

「ただ死を怖れる」のではないという場合、私が念頭に置いているのは死に至る時間(おそらく人生でもっとも濃密な時間のひとつになる可能性のある時でしょう)をどう過ごすのか、ただ死を待つ時という消極的な意味ではなくもっと充実した時とするにはどうすればよいのかという課題です。

「ただ怖れる」という態度だと、徳永進さんは「過緊張」という言葉を使っておられますが、死を前にして恐怖で立ち尽くすだけで終わってしまいます。それではせっかくの時があまりにももったいない。たとえば、最後の時は「自分」を発見する時でもあろうと考えます。これが私の人生だったのだ、これが私だったのだ、とまさに実存的な自己確認ができる可能性がそこには存在するでしょう。人生が自己形成、自己確認の旅路だとすると、その終わりに、その終わりの地点に立ったからこそ、やっと自分と巡り合うことができるのではないかと、とも想像します。「ただ怖れる」のではそのチャンスはふいになるでしょう。

出産の痛みと死の痛みの相関ですか、面白い発想ですね。これはぜひ五福さんをお願いします。どういう図が描けるのかとても興味深いです。今度の「通信」にそのテーマで書いていただけませんか？
とりとめなく書きましたが、コメントへの感謝をこめて。(2003.06.24)

Poème

もつともな

上野山 定由(参加者)

親が言うのには
子供が欲しいので産んだ
お前をと 特に望んだわけではない
たまたま 生まれてきたのが お前だ

彼女が言うのには
愛しているわ でも理想の恋人じゃないのよ
理想の恋人を探すのは とても難しい
見つかったとしても 相手にしてくれるとは限らない
だから 手頃な相手として 貴方を選んだの
何なんでも 貴方でなければと云うわけではなくてよ
結婚しましょう

日没後までもない まだ明るさの残っている海辺
空と海の紺青が溶けあつて しだいに深くなつてゆく
見とれていると 空と海とが声をあわせて言うのには
お前を感動させるために 手間ひまかけて
この状態をつくり上げているのではない
関係のないお前が 偶然 来あわせた

砂浜に寝転んで
何気なく胸に手をやると
鼓動している 私的心脏だ
心臓が言うのには
お前の身体のみならず
血を送らねばと思つて 鼓動しているのではない
胎内でつくられた時から死ぬまで

会員短信

◆哲学学校の会員や参加者の中には、それぞれの関心・立場からさまざまな市民運動や研究会に参加・運営しておられる方がいます。そうした方々が、お書きになった文章や活動紹介を兼ねて機関誌などを送ってくださることがあります。最近はそのようなものをいただきました。会員交流の資となるようご紹介いたします。(※各連絡先は哲学学校事務局までお問い合わせ下さい)

●『道路公害から生活をまもる みちしるべ』第24号、阪神道路問題ネットワーク発行

「私のまちづくり」(砂場 徹…哲学学校会員)ほか掲載

●『いこいの便り 夏号』編集人・いこいの広場ひょうご、関西障害者定期刊行物協会発行

「あいさつ」(義積弘幸…哲学学校会員)ほか掲載

●『ニューズ・アソシエーティブ』第203号、経済研究会発行

「ほか掲載

「デフレの瀬戸際(恐慌)にある世界」「回復基調といわれるアメリカ経済はどうなるか」

近況・心境報告 [死に勝つ視野を見出すために]

高根 英博 (会員)

今回またまた登場します。平等さんとの死後の論争は続いています。今回はちょっとコマースシャルの文章を書こうとしています。というのは、私、会社を辞めることになり、次の予定を立ててまして、その報告をさせてもらおうと思います。

この2年、介護保険の事業の仕事をしていたのですが、わけあって辞めました。介護保険事業もなかなかたいへんで、この4月からも、運営が厳しくなったようで、どこのケアマネも、事務処理でフーフーいっています。こちらの仕事は、福祉用具の納品で、これも細かい仕事で事務処理も多く、サービス残業で成り立っている状態で、先の見通しがたたない現状でした。毎日12時近くまで残業があり、週休二日制ですが、土曜日も出勤しないとおっつかないという具合です。

そこで辞めることになったのですが、次の展開としては、前の稼業しかなく、しかも不安定な自営しか残された道はありません。で、その稼業に復帰することにあいなりました。その稼業とは、グラフィックデザイン業でして、まあ印刷の商業図案屋です。この世界は、それなりに自負するものはあるのですが、安定した方向にいくためには、まだ時間と修行が必要です。うまくいきましたらおなぐさみ、というところです。

最近、紙媒体の需要は減ってきていると思います。印刷も電子化の方向まっしぐらで、インターネット産業が一般化しつつあります。一応こちらは、それに対峙するカタチで、紙媒体にこだわり「図書設計」という方針をたてました。いわゆる本です。それを基本にして、グラフィックデザインをこころみていこうと思います。

印刷の特に編集デザイン分野は、まだまだ完成されているとは言い難いと思っています。せいぜいチャレンジしていきたいと考えます。

もっとコマースシャルしないといけないのですが、一応あいさつだけさせていただきます。やはり今回も、「死後はない」について書くことにしましょう。というのも『季報唯靴論研究』で、

また文章を書いてしまったので、それについてコメントをしたいと考えているからです。平等さんとの論争と違うかっこうになってしまったので一言いう必要があるような気がしています。『季報唯靴論研究』の文章は、ちょっとタイトルに酔ってしまって、收拾がつかなくなってしまうという事情があります。「死のイデアル・タイプス」というタイトルに酔いしれて、自己陶醉してしまったようです。でも自分でも結論部分は意外なものになって、またそれが気に入っているのです。ほとんど忘れかけていた『社会認識と歴史理論』という本を思い出し、それを結論としちゃったのでした。

やはり、死に勝つという考え方でいく場合、私の結論としては、宗教もダメ、宗教の補完もダメ、平等さんの「死後の世界」もダメとすると、現実しかなくなるわけです。そして襲ってくる死に対しては無視するという結論になるのです。当然無視ではすまないのですが、その決意が死に勝つ方法というのが、一応の私の結論ということです。もちろんこれは一般化はできませんが、それしかないと思っています。

最近私も50歳をこしましたが、年を取る、老人になるという感覚ってなんだろう、と思います。衰えて何だろうと思います。確かにダメになってきているのですが、そんなことは大したことではないのではないかと、思うのです。名探偵コナンのセリフで「真実はいつも一つ」というのがありますが、真実を探すのに若いも年寄りもないと思うのです。全くのこれは現在の私の実感です。死への思考も、むこうが勝手に襲ってくるだけ、かかわり知らず、が今の実感です。というより「死が来たりて死ぬ時、死ぬがよし、死にそのうて死なぬなおよし」(仙ガイ)ということですから。そして「一つの真実」を探し続けることだと思ふのです(現在、闘病されついる山口勇先生の文章を読むと、なんとも私のギロンなど呑気かとは思ってしまうが)。

また、人は心のどこかで生死を常に考え続けているのであって、その「内面の自由」を尊重しなければならない、ということだと思っています。「内面の自由」とは、その人が何を考えているかはわからない、ということだと考えます。実際その人が死ぬ時、何も考えずに苦しいだけで何かを呪っているだけなのかも知れない。でもそうみえているだけかも知れない。

それは、真実はわからないのであって、だから尊重すべきという意味ではなく、やはり一つだけの真実をみいだす努力は当然必要なのです。しかし、その真実の「内面」は尊重しようということですが、その人のあり方とは、その人の時空のかかわり方にあるわけで、それは社会性・歴史性ということだということです。そこしかない、ということです。その人が具体的にどの時にどこで生きたかが実はすべて、というべきだと思うのです。そして死によって終わるといっても厳粛な現実ですし、「死後」は本質的なことがらではないのです。そこが「死後はなし」にこだわるころなのです。

もちろん、世の中は、これからも宗教で死からの救済に確信をもつことは続くでしょうし、宗教外でそれに代わるものの確信もあるでしょうし、平等さんの「死後の世界」への継続の確信もこれから大きく広がり一般化するだろうと予想します。基本的に平等さんの救いの方向を当然支持しますが、でも反宗教的な視野、私が仮に言うところの唯物論的な視野も思想的に重要だと考えるのです。それは不安と混乱をしか導かないとしてもです。不安(死への絶望)と混乱しか結論はないとしてもです。

道元の修行のエピソードで、修行で死んでいく人に対して(確かに多くの人が修行のきびさが原因で死んでいったと予想できる)、尊重すべき死だと道元は説いたと聞か(出典は知らない)、このケースをどう判断すべきでしょうか。

そのケースは、宗教にありがちな無意味な死なのか、それとも積極的に評価できる死なのか。私は真実を探すための死として尊重していい死だったといていい、と感じるのですがどうでしょう(こんなことをいうと宗教を認めることになっちゃうのですが、またオウム真理教も認めることにもなりかねないのですが……。)ややっこしいところですが、ようするに死をこえて一つの真実を探す姿勢が重要だと思うのです。もちろん、そ

の一つの真実の中身が問題となります。

一つの真実を探す、とい姿勢は、批判的姿勢とすることができます。最近、共生という言葉が嫌いになっているのですが、緊張感のある態度のほうが思想的態度としては重要だと思っています。今レイアウト作業をすすめている室伏志畔氏の主張を勉強させてもらっていますが、古代史においても、天皇一系史観を反駁するために、新しい視点を築こうとされています。それと関連することですが、東アジアの古代史の日本と韓国の差においても、一つの真実を探求することは、重要だと思っています。

批判仏教においても、法然の評価で論争を繰り広げていますが、その中で、今の宗派に拘束されない思想的な真実の一つのギロンがされるべきだと思います。いわゆる共生してしまっているのです。その中で水と油の関係の法然と明恵のどちらを評価するかというギロンがあるのですが、学者一般はそんな評価はなく、どちらも歴史的に重要との評価で終わってしまったような気がします。そんな中で、袴谷憲昭氏の法然評価は、画期的といていいと思っています。で、同志の松本史朗氏と、新たに論争になるのですが、それでも袴谷氏の法然評価は支持すべきもの、と私は思っています。それまでの日本の既成仏教の全否定がそこにはあるがゆえに、私も法然評価を支持したいのです。これも、真実の一つ！という姿勢があるといえます。

かわりばえのしないギロンですいません。最近簡単に作れるホームページ(文章だけの)というのをさわり始めています。うまくいきますかどうか。いちおうアドレスをお知らせしておきます。壇谷雄高について、続きを次回は語ります。

[ホームページアドレスです。]

<http://mypage.odn.ne.jp/home/takane>]



『臨終の宴』～死神の受胎告知もしくは14の仮言の月～

小橋 一夫（会員）

（ひとりで死を決め、死を迎えるための思い巡らせ。そのアレコレ）

【あなたはわたしがみた夢をみたのか】

こんな顔を死ぬまで見続けるなんて死んでも嫌だ。でも、よき伴侶を演じきる自信は有る。膝に性を感じてウズいた。幼少時、近所の子の出血した膝に三日月のようなものが浮かんでいた。あれは何だったんだろう。胃が重い。爪先が冷たい。逆剥けが痛い。でも今、毛を抜いたのが一番痛い。

よく夜中に目覚める。でもホッとする。死ぬなら夜だ。そういえばカラスを見た。いよいよかな。好きな花はプリムラ。お供えに和菓子は嫌だな。昔、取りあいになって、いとこの〇〇にコンパスで刺された。親には黙ってた。いまでも跡が有る。

紅茶にシリカゲルを入れられた。ポヤ騒ぎの真犯人は、隣の弟のほう。

バンなら神戸屋。ヤマザキのは添加物が露骨だねえ。いつかK君に謝りたい。三叉路の信号、このごろ3秒は長いと思う。なんでもいいけど店長シネ！

さーっと、わすれるつもりが思い出した。スタッフには子供がいたんだ。あゝー。(あれ、ちょうど0時)

叔母さん、あなたは知っていましたか。

今日、一万回以上思ったこと。今日の最後に思った、今みたいなこと。

あなたは、そのうちの何を知っていますか。知らないなら、引っこんでなさいよ。

あなたは、わたしと「生きている」のではなく、あなたは常に、わたしの外に、既に居る！

わたしは、わたしにまつわる過去の全てから、連想することができる。そして、経験したこと、ちょっと経験して好きになった人、わけがわからないけど好きな食べ物を思い浮かべ、今夜から夜食を絶食できるか、人生を決断するのだあ！

わたしに触れずには、あなたは、わたしの小指

ひとつ動かさない。わたしはもう、背後霊のストーカーのように、わたしに120000日以上、完全密着しているのです。

もしかして叔母さん、あなたが私の死に、勝手に口を挟むことが許されるとでも？

（昨日わたしが見た夢が何だったか、一緒に思い出してみよ）

【個の命の共有】

宿舎で首吊りしようとしたら、優しい上官に見つかり、たいせつな命だ、敵に命中させるまで取って言って言ってくれました。ひどく殴られて血を吐いたけど、ちょっと感動。自分ひとりの命ぢやないんだね。成長した自分が嬉しい。←？

【介入する口実】

そのときTVに、『死の選択への他者の介入』を主張する男の震えている様子が映しだされた。

響きあう生？ この男、緊張しているのではない、うまく言えないことを無理に言おうとしている自分に気づいているのだ、そう思った。自分の自由、自分の命、自分の命の自由。そこに他者を介入させる『論理』は、そうは見つかるまい。

当人らが自由に身を処す、すなわち“自決”を如何に阻むか？

たとえば命を奪う口実、つまりは武力を使う口実。われら、口実が巧妙になってゆく進歩史観とともに在らねば……。独裁者からの解放？ 核拡散の防止？

【無は有を兼ねる】

少年が生前に意思表示できなかった臓器提供を、法改正で意思表示可能にするというなら話は判る。だが意思表示の無かった少年の臓器提供を親に決めさせる、などというのはいかがが。 (ましてや“少年に意思は存在しない”sというような欧米流の法的あつかいなど……)

『拒否なき者に限って、臓器提供させうる』？

←詭弁。(高度医療に利する)

どこかで聞いたと思ったら、首相の弁に、こんなものが……。

『大量破壊兵器が無かったとは断定できない。ゆえに(侵攻・占領は)否定されるものではない?』

←詭弁。(冤罪で極刑に処すおつもりか)

【死の参加資格】

性的虐待を食らった女子高生はどうだろう。東大の調べで5人に1人がセクハラ被害者、多くは身内によるもの、というのが本当なら? 人払い。死の床で叔父の顔を見たらベッドで吐く。

【絶対孤独者】

ワル夫さんは性格が悪すぎた。そんなだから誰からも相手にされず、最後の親友と大喧嘩して、孤独死とあいなりました。

生前、何か悪いことをしたか。否。生前、何か悪いことをされたか。否。なるほど孤独と罪とは無縁らしい。では、つねに『孤独死』は悪いことか。否。(頭から悪いことのようにいうから、なお後ろめたくなる社会的強化と形骸化)

嫌われて、嫌うみんなを嫌っていて、まあ1人もよいか、と1人で死ぬ人間の多かるうこと。しかし、それを『他者が欠落した死』というのでは、あんまりじゃありませんか。(できれば「都会人の孤立」対策もほどほどに)

【共同体の役立たず】(人生の価値の審査は自分自身で)

ダメ夫さんは路上に住み、路上で死にました。コッカに貢献したか? レキシに貢献したかって、ヨロヨロと車道に出て轢死。

さっきまで1人で廃ビルに雨宿り。寝ているのか死んでいるのかと訝ると、ムクリと起き上がり、あっという間に“犬のように死んだ”だけ。意図しない最期だったなら、それさえ除けば人生まあまあ良かったんじゃない、悪いと言わない限りは(当人が)。……事故死によっては、遺体の処理費が下りるらしい。(と知っていたらしい)

まるで緊張感の無い【緩やかな死】

俺が死ぬのに微笑む妻。俺には死ぬ瞬間まで、この微笑みの意味が判らなかつたのが不幸中の幸いだが、不謹慎にも、これで漸く不倫相手と結ば

れると思っていたらしいのだ。

まこと、この末期は他者には人生絶頂の慶事なり。妻は親密圏を解消し、失樂園(?)へと乗り換える(ワクワク)。姉は遺産の使い途を、兄は葬儀の段取りを、仲の悪い弟はというと、サッカーの試合結果は? などと頭に過らせてしまっていた。おい、俺に集中しろよ、最期の言葉を聞いているのか。人生最大のステージで客席がざわついている。が、そのことに文句ひとつ言わない寛容な有徳者となろう。死んでから愚痴を言った者など無いのである。死人に愚痴なし。あ、愛人への辞世の句、ポストに入れるのわすれてた。いまからメール打てるかな(さて間にあうか)。

この世で最後に見たのは末っ子の大アクビ。たしかに平和なのだが……。

(皆さん、人が死ぬというココ一番のシーンではケータイはマナーモードにしておきましょう。←って、言わせるなよう)

【他者一般への好悪】

市民たちは、それぞれ2つの顔をもち、成功者にはエビス顔を、敗北者にエンマ顔を向けていた。成功者には他者はエビスであり、敗北者には他者はエンマだったのだ(他者の相対性)。つまり「死に他者を絡ませたがる」のが下心(メタお節介)ではないとすれば、そういう志向性は、要するに「性善説の死生観」からくるのであって『性善を経験すれば』『他者主義』に『性悪を経験すれば』『孤立主義』にと……。

【1人でも人間】(3個でもサンダルx)

離れ猿は猿として去る、おそらくは己の意思で。猿山を下りても猿はサルにならず、人境を去っても人はヒトには「墜ち」ない。人間と猿間(えんげん)の相似?

【説得権】?

自殺を制止する権利があるのは、借金取りと、手足その他を拾う「鉄道員」だと言ってみる。

【結論のようなもの】

死に関する学知が、趨勢に範を取り、趨勢に与するような「多数知」に留まる限りで「少数派」には輝きを失ったままであろうし、しからば世間を騒がせる少数派の救済にはなりえず。(はたまた『学び』そのものが、その程度のものなのか)

【死の集団】(パラドックス)

幸福を「理想」と「現実」の一致とする。

幸福であるために「理想」が<高水準>であれば「現実」を<高水準>にしなければならないだろう。確実なのは「理想ゼロ」「現実ゼロ」の状態、すなわち死である。

死は幸福であるか。(死が幸福なら、何故ひとは「幸福」を最も忌み、避けようとするのか)

不可逆の死には、安定性(永続性)さえもが保証されている。死は「完全幸福」といってよいかもしれない。しかし、この「死の幸福」には \times 個別性の喪失 π という問題が残る。灰となった死者は、直接には「他者の記憶」と「生の痕跡」を遺すのみ。いまや個体識別できるような個性が脱落してしまっている。では「誰でもない存在」の幸福とは何か。

ここでボーダレスグループ(自他融合集団)というものを考えてみる。この集団では『他者の存在が自己の存在を成立させ、かつ規定しあうような(多対多の)相互依存関係』が成立している。つまりは自他が絡みあって一体なのである。それは自己が他者らを含み、他者らは自己を含むという単位構造をもつ。したがって「個別性」(意思の個性)というものには、あまり意味がない。

さて、いま構成員の1人が亡くなった。この集団では亡くなれば除籍というわけではなく、死者と一体なのである。しかも他者と一体である死者は \times 個別性の喪失 π を抱え込まなくて済む。

ひるがえって「死者が幸福である」とすれば、幸福化(死者の増員)によって幸福度の高い集団となるわけである。この快樂計算では死者の構成比率が高いほど幸福量を増し、全員が死者であるような集団ともなれば \times 最大幸福率 π に達するのである。

【権利の排他性】

たとえばテーマパークというのが「テーマにもとづいて統一的かつ『排他』的に、施設運営をはかるアミューズメントパーク」だとしよう。ここで『排他』という言葉には『疎外』ほどのネガティブさは無いかもしれない。

権利を主張するとき、権利そのものを排他的として、権利を制限するような「論法」が有る。もし「他者との親和」が目的(与件)であれば、基本的人権すら排他的と捉え直されるらしい。(権

利の制限は、じっさいには権利よりも効力の弱い「柔らかい概念」への変更というかたちを取ろうが、たしかに、より柔らかいほうを好む精神風土(趨勢)というのが有るのかもしれない)

しかし、権利が排他的だといっても、その用い方には「完全なる自制(贈与)から完全なる行使」までの幅(伸縮性)があるだろう。したがって権利とは必ずしも「他者に敵対的な概念」ではないはずなのだ。

それどころか排他的な権利といえども、他者全体を否定するものではないのである(何かについての権利……局限性)。ところが人と人との関係の文脈で語られると、さも1人の他者の全体を排除しているように聞こえてしまうのである。

否。他者(や他者主義者)は私的領分に踏みこんでいて、いざ撤退を要望されると、他者を排除する権利は無いなどと“鬼が放逐したかにいう”が、先に『私の身体から私の権限の一部を』追い出したのは何処の誰だったか。

……わたしが言いたいことはただ一つ、『わたしの生死に「不当に居座る他者」よ、去れ!』だ!

→まさに中東問題! →有事法制(私権の制限!)

※領事館前(戦時中)に陣中見舞いに来て下さった皆さん、ありがとうございました。今日(13日)は丸機2人・天満1人に追跡されましたが元氣です。(職質は7分53秒の録音に)



森田療法と西田哲学について

— 「そのまま」の概念とらんだむ入院日誌（2）

松尾 猛省（会員）

●起床第19日 4月28日 晴のち雨

今朝は六時前に眼が覚める。遅いと起こしてもらうよう頼んでいたが、依頼した人より速く起き、逆の立場になる。面白いものである。人間の気分というものは、不思議なものであり、亦力をもっているものだ。

「気分の妙味はつきません、気分を思考の対象にすると真の味わいを失うことを申したままで、それを承知の上ならどんなに取り扱ってもかまいません。」

Mさんが退院とあって、布団の荷造りを手伝う。「家内がやかましくいわなんだら、もっとここに居りたい、ほんとに居心地のよいところや」と感慨をもらす。

午後、大阪より友人たちが来る。面会者はこの生活を尋ねる。禅の考え方そのものが生活であるような、この療法に友人たちは納得した。本は読めるようになったかと訊ねる。「読めることは読めるがただ完全を望まず、そのままがいいのだと思うようになった。完全を求めない、あるがままでいいのだの思いを肯定しつつ歩むよりほかない。」退院していく人達の心の中に喜びと惜別の心あることを知る。別れは一面悲しい現実でもある。

「うれしさ、かなしさのそのままが現実の徹底です。」

●起床第20日 4月29日 晴

今朝も早く目覚める。心身ともに順調だ。今日は妻が来ることになっている。昼間から風呂に入る。なんだか勿体無い気分、温泉気分に似たもの感じたが、午後から亦作業と思うと、そのちぐはぐな思いも「そのまま」という観念に消えていく。

妻が来ていた。ちかくの泉涌寺へ行く道ので、「気分は良くなった？」と訊ねる。

「良い」と言えば嘘になるし、「良くない」も当を得ない。良いといえる自信はどこにもない。今自信があって数分後に無いとも言える厄介な心の状態である。

「そのまま」の概念を少し噛み砕いて説明する。毎回の院長の講話をノートに取り、その意味を咀嚼する日々のごとも告げる。

「そのままって、便利で都合のいいものね」と妻がいう。そのとおりかも、何にでも、どこでも、全く自由自在に適応し、使いこなせるもの、しかも一ヶ所にとどまらない。

こだわらないもの、心は自分で自分をコントロールできない厄介なもの、こういうことが分かりつつあること。

「むしろ、考え思うことの、絶対自由である世界のことです。」

●起床第23日 5月2日 晴

今日、神経症は観念と行動のバランスを得ていないことに、初めて気づいた。観念の世界に閉じこもり、追い掛け回している間に行動の意欲を無くしてしまう。思索、空想の葛藤それ自身を克服しようとしている間に実際の生活に手が出なくなる。むしろ、観念が手を出すことを拒んでしまう。

「よく見抜きました。これで理論的にはよしい。」手を出し観念に追従するのであれば、問題は無い。必要なことさえやれば問題は無いのに、こびりついた観念の世界がその前に立ちはだかっていた。手を出そうとおもえばいくらでも、出せるのに。「四方八方気を配り、そのままやりなさいという言葉の意味が一層はっきりしました。」

●起床第25日 5月4日 晴

今朝もいい天候だ。6時15分起床、院内に響き渡る拍子木の音が心いい。このごろ時間のたつのが非常に早い気がする。後五日で起床一ヶ月、だんだんと意欲がわいてきた。

「日々時間を超える貴重な体験です。」

昼食後、昨日より描きかけの薔薇の花の仕上げにかかる。絵は高校時代より好きだったが、勤めだしてからは、気持ちがあってもなかなか描けなかった。亦その気になれなかった。ここにきて初めて画紙に向かう気になった。

薔薇の花びらをじっと見詰める。何とあでやか

で美しい色なのか。薔薇が放つその生命力、その精神を感じるが、絵の具によって再生されるその画面には意図したのが中々でない。

結局、幼稚なぼくの絵がそこに再現されるだけだ。

「先に何らかの精神があって、それを表現するのが絵なのではありません。あなたの“描くこと”そのものが精神なのです。その色と形が精神にほかなりません。おのずから、薔薇そのものとは別な、あなた独自の精神が現れるのです。」

●起床第26日 5月5日 晴

絵の精神についてお教えいただき有り難うございます。薔薇自身の精神でなく薔薇を見る私自身の精神を描く。いわれてみると誠にその通りですが、その当たり前前かが日常言われるまで気づかないことがあります。幼稚な時は幼稚なりの精神があるということですね、そうでなくては、絵など恐ろしくて描けないかもしれません。

「絵はだれもが(かれ独特の絵を)描く事ができ、本来(よほどの苦心をしなにかぎり)それを他人がまねることは難しいのです。こころもほぼ同様で、そのままのとき独自の精神が発揮されるのです。」

●起床第27日 5月6日 雨

「そのまま」とは知らず知らずのうちに自己が変革されていくものでしょうか。

「はかりしれぬ、大変革です」

この頃こんなことを考えるときがあります。患者の中で40日以上たっても退院しない人がいますが、その人が以前と比べて考えも変わっていないという場合、勿論心のもち方、ものの考え方は自分で調節できないことも判っていますが、ただその人がそのまま前進あるのみで、一向にもの考え方、見かたも変わらないという場合、その人にとっては症状よりも、ものの考え方、たとえば「素直な気持ちになれない」と言う気持ち、強いて言えばその人がその気持ちになりさえすれば、立ち直れるという場合どうすればよいのでしょうか。

「素直な気持ちになれない」まが絶対肯定されるのです。」

その人にとって致命的なのは、症状、苦痛ではなく、「心が変わらない」ということ。そのままから判断して心が変わらないのは当たり前前ですが、変わらないということはその人にとって正に「絶望」なのです。「そのまま」を強調する

ことはその人にとって「絶望」を強いているように思えます。変わらないということは、まさに絶望なのです。

「絶望のまま進むのみであります。絶望から逃げてはいけません。」

ぼくは2、3日前に観念と行動のアンバランスに触れましたように、やはりこの場合「変わらない心の観念に捉われているより、むしろ観念はそのままにして手を出していくより方法がないことに気づきましたし、又それ以外に手段、方法の無いことも知っています。

「よろしいです。」

武者小路でしたか、「僕の前に道は無い、僕の後に道ができる」といっていますが、後にできた道は予想してできたか、予想とは思ひもかけなかった道とかは、分からないもので、変わるとか、変わらないとかも全くかわりの無いものとみたほうが良いと思う。

自分の心が調節できないように、自分の未来に対しても、全く心は調節できないもの、ただ、今言えることは自分の足跡を今変えることはできないが、変わったと見ることはできるということなのです。

観念に捉われ、苦しんでいる人を見て、自分の考えを整理したかったのと、先生のお考えを承りたく。

「大変、結構です。この悩みをもやし続けると立派な人生ですよ。」

●起床第28日 5月7日 晴

梅雨にはいったかのような昨日までのうっとおしい空にひきかえ、今朝は起きると久しぶりにさわやかな陽の光がさしていた。二階から見る下のいちじくの木が日に日に大きくなっていく。ぼくが入院した頃は幹だけで何の木か判らなかったが、いつの間にか青い芽が吹きだし、今ではだれが見てもそれと分かる大きくなり、太陽の光を一面に浴びている。今朝、何気なく開けた窓辺に、それが異様に美しく見えました。

「自然はあらゆるものが美しさに満ちています。」

はかりしれぬ大変革と聞いて誠に嬉しく思いました。今日の講話のなかで「あることは、ないことである」「ないことは、あることである」を説明された。

まさしく、僕の間答もこれに似ていたと思います。自覚は感性や知性とは無関係と申されましたが、その無関係なそのままが前進するかぎり、そ

のままは一向に変わらなくとも過去となった“そのまま”の連鎖とでもいうのでしょうか、それは時に質的な変化でさえあると思います。それは自己の感性や知性とは関係のないところで。

「卵から雛になるような変化は無限にあります。」

「絶望のまま進みなさい。絶望から逃げてはいけません。」講話での話よく分かります。絶望から逃げようとするよりも、絶望の中に飛び込んでいく。

「目標は絶望でなく、生活そのものです。」

絶望の虚妄なるは希望に相同じい」魯迅の言葉であるが、絶望と希望はイコールで結ばれているような気がするのですが。

「この虚妄もそのまま含めて人間の真実がありうるのです。」

●起床第30日 5月9日 雨

2、3日よい天候と思っていたも、又きのうから雨だ。六時起床、廊下を掃いたあと便所の掃除をする。

作業室に行くと、2、3日前に起床したH君が黙々とアイスクリームの袋作りをハンダゴテでやっているのを見た。実に淋しい表情である。H君を見ているとその淋しさがこちらにも伝わってくるように思える。中学生でこんなところへひとりぼつねんと来ること自体淋しいことである。純情で孤独な少年に違いない。先日交通事故死の父のこと思い出して泣きじゃくっているのを見て、その悲しみに如何なる言葉も介入させることできないこと知りながら、慰めは涙を止めさせることはできても、悲しみをすくうことはできない。

今はただ、泣けるだけ泣くより方法がない。そして、分からなくとも黙々と作業に手をだすのみ。

お母さんは夫の死と共に息子への心労が続く。人間の世界は思いがけないことの連続のような気もしてきました。

●起床第32日 5月11日 雨

今日は茶話会、役員任期は茶話会をもって終了する。午後より菓子を買いにKさんの車でスーパーへ行く。なるべくデラックスでいこうと思っても、予算の関係でそうもいかない。

「この苦心がそのままの生甲斐です。」

茶話会六時より開催、余興は挨拶遊び、ゼスチャー等、みんな笑い転げる一幕もあり、こんなところ見ればどこに心の病という感じだがそこが心の病の不可解なところである。

刻々と、退院の日が近づいてくる。じつにいい

ところで離れがたきところなれど、そうともいわず、そのまま前進あるのみ。

「ただいまの必要にすすむのみです。」

S誌の筆記、N、K、私と三人でやることにします。

「これは大変ありがたいことです。よろしく願います。」

●起床第35日 5月14日 曇り

六時起床、トイレの掃除をした後、部屋をかたづけ、朝食後S会雑誌の原稿整理にかかり、十時ごろ仕上げる。責任を果たしたようでほっとした。早速事務所の人へ持っていくと、お礼だといって、S会の別冊雑誌を下さった。

午後より、USA GENU先生の胸像付近をバックに絵を描いていると、H君の母が見えて、「息子も絵が好きなので、一緒に描かしてほしい」と頼まれる。退院をまじかに控えているので、その機会もないと思うが、H君となりで描き出したのを見ると、海をバックに車を描いていた。父と共にいった海辺のこと想い出しているのである。

H君から父の影像是なかなか消えないのだと思った。一心に描いている時が三昧の境地、何もかも忘れる。それでいいのだ。

退院の人たちが、講話のおさらいをしておかなくてはとあわてられている様子見受ける。分かったつもりがいざとなると、何をつかんだのかよく分からぬ心境にもなる。ただ、もう小難しい説教はいらないのだということが分かればよいと思う。「よろし」

果てしなき議論の末にみるのは、ただいまの自分が議論しているということ以外にありえない。つかもうとして、つかめない、求めようとして求められない何ものか、それにきづき、それに順応すること、だけでいいのではないだろうか。

「空手にして、故郷に帰る。何処に行っても“そのまま”です。」

●起床第38日 5月16日 曇り

入院以来早いものでいよいよいよいよ最後の夜になった。ふり返ればまったく早いものである。当初は不安だったが、その思いもいつしか消えて今では不思議としか言いようも無い。症状もあるがもう気にならない。あさってより、愈々もとの生活に戻る。入院42日瞬間間の日々であった。過去の苦悩からみれば瞬く間の出来事である。この短い期間にこれだけ心のゆとりもでき本も読めるようになった。

心は自分で調節の効かないものを知ったことが大きな収穫である。作業を通じ、講話、スライド、朝の清掃等今後の生活上の指針、全く神経症とかわりなく貴重な人生哲学を学び教えられました。

「ここに眼をつけられるようになったのは、全治の証拠です。」

退院後はいろいろすることが多く、忙しい日々がつづくものと思われまふ。そしてまだまだ悩める人たちが当療法を知らずに過ごされているかと思われまふ。その方たちにも早く真実への道しるべなる本療法を知り、更生の道へ歩まれんことを切に望みます。誠に有り難うございました。

「不安を超えることは同時に安心を超えることでもあります。ご退院を祝します。」

◆そのままの概念

らんだむ日記を読み返し、すこし整理してみた。日誌は作業療法の日々の中に院長の講話、スライドなどを通じての自覚など日々の所感の体験記である。

要するに院長の示唆は「そのままの概念」を説明し患者の捉われの心を如何に解きほぐし、正常な日常生活への回復をはかるかにかかる。

森田療法を4日間体得したからといって、そのままの概念を即座につかみ、もう神経症とはおさらばかというそう簡単にはいかないだろう。

週二回の割合で午後から院長の講話があり、院長は手を変え品を変えそのままの概念を説明するが、初心者にとっては話の内容をある程度理解できても、すべて疑問なくわかるかという、なかなかそうでもなさそうである。

患者たちは熱心にノートを取り、部屋で読み返してみても、すんなり頭に入っているかという、何を聞いたのかさっぱりといったこともしばしばである。

ある日、院長は黒板に丸い大きな円を描き、そのなかに小さな円をいくつも描き、そのどの円にも中心がある説を唱えた。

平たく言えば、何処にも円が描け、そしてその中には中心があるというのである。

自由自在の心境、それはまた、こだわりのない心境というのだろう。どこにも引っかかりのない心の自由自在さ、その説明にあえてこのようなかたちで、説明されたのだろうと思う。

◆こことは

森田療法を学ぶ上においても、あるいは日常においても、いったいこことはなにかを考えると、いつも思い出すのがある禅書を読んだときのことである。

その本の禅問答にこんな話があった。ある日、和尚が小僧に問う。「お前はふたことめにはここ、ここというが、いったいお前のここはどこにあるかいうてみてみい」小僧ははたと困り、はじめは頭の方を指していたが、やおらその手を胸近く下ろしそこへ指差した。

「おお、そこにあるのか。間違いないか」「はい、そうおもいます」「そうか、間違いないんなら、そのところを取り出しその証拠をこのわしにいますぐ見せてみい」

いわれて、慌てふためき、所在無さげに佇む小僧をこちらは浮かべるばかりである。

こことは一体どこに宿り、どこから思考をと思えば、それはやはり脳髓であるにもかかわらず、この所の所在をHarte におくのは何故なのか。心臓にこの所の蔵でもあるのか。考えれば尽きせぬ疑問もわいてくる。

不思議大発見でもないが、ここを突き詰める時わからないことだらけである。そのところは形態がないだけに、つかみ所のないものである。また曖昧模糊賭としてこれほどたよりないものはないの思いする。例えば、日常の問答においても、相手がイエスといっても、それが裏切り、真実かどうかとも、検証のしようもないのが、このころのなせる業である。

そのあいまいな、とらえどころのない心に捉われが生じ、それが昂じてにっちもさっちもいなくなる時、心の病が生じる。その種類は様々な形態となって現れる。

森田療法ではその捉われのころを、あるがまま、そのままの概念を自覚させ、日常生活に順応させることにより神経症からの開放を目指す。次回は、その「そのまま」の概念を西田哲学の純粹経験の立場より観照してみたいとおもっている。

「大阪哲学学校通信」の発行に関するガイドライン

【「大阪哲学学校通信」を発行して以来、まだ不十分ながらも、会員・参加者からの積極的な投稿も増え、内容のある校報になりつつあると、運営委員一同喜んでおります。

ただ一方で、財政面等の事情から紙面が限られているため、ある程度編集段階で掲載原稿の取捨選択や分載などの判断をしなければならない事態も時に生じてきています。また編集・発行の手間もできるだけ軽減しなければなりません。

そこで運営委員会にて、「通信」の発行に関し下記のようなガイドラインを定めました。今後は、このガイドラインにそって「通信」を発行していきますので、投稿される際には内容をご承知おきくださるようよろしくご理解・ご協力をお願いいたします。-運営委員長】

- ①「大阪哲学学校通信」(以下「通信」)は、大阪哲学学校会員(以下「会員」)どうしの交流を主な目的として大阪哲学学校(以下「本校」)が発行する校報誌である。
 - ②「通信」は、本校運営委員会の責任のもとに、原則として年4号(3か月に1回)の発行をめざす。(参考までに、現在は1月、4月、7月、11月という発行ペースです)
 - ③「通信」の体裁はB5版とし、総ページ数は送料を考慮して20ページを上限の目安とする。特に増ページが必要な場合は、運営委員会で相談する。
 - ④「通信」は、会員を対象に配布する。ただし、本校の活動を紹介し参加・協力を得るために、各新聞社の学芸・文化担当部署や本校の講師、協力者、催し参加者、会員の知人等にも配布することができる。
 - ⑤「通信」は会員からの投稿と講師への依頼原稿をもとに作成する。また、非会員であっても本校の催し参加者からの投稿は可能なかぎり受け付ける。
 - ⑥投稿原稿のテーマや形式については特に制限を設けない。ただし字数は、総ページ数を考慮して400字×15枚(6000字)程度までを目安とする。それを超えるものは分割掲載などの措置をとることがある。なお、投稿は完成原稿とし、手書き原稿の場合のみゲラ刷校正を投稿者が行なう。
 - ⑦文章責任を明確にするために、掲載時の投稿者氏名は本名(もしくは会員が周知している通称名)を原則とする。特に理由があって仮名を使用する時は運営委員会の了解を得る。
 - ⑧「通信」の編集発行実務は、運営委員会で決められた各号担当運営委員(以下「担当委員」)が、他の運営委員・会員の協力を得ながら責任をもってその任に当たる。
 - ⑨投稿原稿の取り扱いや紙面構成について、投稿者は担当委員に原則として一任するものとする。
 - ⑩投稿原稿を当該号にそのまま掲載できないと担当委員が判断した場合は、できる限り事前に投稿者に理由を説明し了解を得るよう努める。また、かかる措置について担当委員は、事後に運営委員会で報告し承認を得る。投稿者から異議申し立てがある場合は、当該運営委員会で検討する。
- ※当ガイドラインは、2003年5月3日の運営委員会にて決定しました。

Information

***** 21世紀研究会公開シンポジウム*****

21世紀の世界秩序を考えるー世界システム・グローバリゼーション・そして“帝国”

◆報告

- ・「近代主権国家秩序の変容とその行方(国際政治)」 榎 堅二(高野山大学、政治学)
 - ・「多国籍企業の諸動向(資本主義世界経済)」 新保博彦(大阪産業大学、経済学)
 - ・「世界システム論の現在(学説史)」 川北 稔(大阪大学、歴史学)
- 討論・司会 田畑 稔(21世紀研究会代表世話人、大阪経済大学、哲学、大阪哲学学校参与)

◆日時: 8月3日(日)午後1時30分~6時30分

◆場所: ドーンセンター(京阪・地下鉄天満橋駅より徒歩)セミナー室(5階) ◆参加費千円

◆問い合わせ先: 21世紀研究会(TEL.06-6840-1056, studies21c@hotmail.com)

夏期合宿のご案内 2003.08.30~31

(主催：大阪哲学学校、大阪唯研哲学部会、「季報・唯研」刊行会)

毎年恒例の三者合同夏合宿を、今夏も下記の日程・場所で行います。昨年はかつてない27名もの参加者があり、大盛況でした。今年も、あるいは今年こそ、ぜひ奮ってご参加ください。

- 日 程：8月30日(土)～31日(日)の一泊二日
- 場 所：信貴山玉蔵院(昨年と同じ場所です)
- 参加費：1万円(一泊三食、交流会の飲物・つまみ付)
- スケジュール：

〈1日目〉

- 集 合……………JR天王寺駅大和路線改札口付近
- 午 後……………シンポジウム・討論(論題など未定)
- 夜……………交流会

※各自の現況報告など、毎年盛会です(ビールも有)

〈2日目〉

- 午前～午後……………研究発表(発表者は調整・交渉中)
- ※夕方には天王寺に戻ります

主催団体の会員の方には、追って世話人の木村倫幸さん(参与)よりご案内があります。会員外で合宿案内をご希望の方は、哲学学校事務局までご連絡ください(TEL.078-981-2210)。

大阪哲学学校活動年譜 (「通信」23号発行以降)

2003. 1.25. 「大阪哲学学校通信」第23号発行
- 1.25. 新年会員参加者交流会「今年、私が注目するもの・こと・ひと」
 - 2. 8. 大衆運動と民主主義……………講師・砂場 徹
 - 2.22. 「日本経済の混迷を問う—バブル崩壊後の日本、スウェーデン、ノルウェーの比較」
……………講師・宇仁宏幸
 - 3. 8. 「労働の復権と地域経済の再生—三池、文革、そして、キューバを手掛かりに」
……………講師・池野高理
 - 3.22. 「郵政公社の発足にあたって—その経過と今後の展望」講師・水野和行・中尾康司
 - 4.12. 2003年度開講講演「現代アメリカ思想再考」(1)……………講師・山本晴義
 - 4.26. 2003年度開講講演「現代アメリカ思想再考」(2)……………講師・山本晴義
 - 4.26. 「大阪哲学学校通信」第24号発行
 - 5. 3. 第8期第2回定例運営委員会
 - 5.10. 「景気循環の読み取り方と今後のアメリカ経済」……………講師・酒井久一
 - 5.24. 「二〇世紀とソ連邦」……………講師・上島 武
 - 6.14. 「日常生活世界の哲学のために」第1回「日常生活世界とは何か」
……………講師・田畑 稔
 - 6.21. 「日常生活世界の哲学のために」第2回「日常生活世界と人間の死」
……………講師・平等文博
 - 7.12. 「日常生活世界の哲学のために」第3回「日常意識と日常知について」
……………講師・田畑 稔